

# 社会モデルの源流を求めて（その2）

——デイビス夫妻のディスアビリティ体験と  
統合化を求める実践から——

田 中 耕一郎

## 社会モデルの源流を求めて (その2)

### ——デイビス夫妻のディスアビリティ体験と統合化を求める実践から——

田 中 耕一郎

#### 目 次

##### はじめに

- 1 マギーが障害を負うまで
  - 2 施設入所の拒絶
  - 3 ケンとの出会い
  - 4 ビアス・ハウスにおける自治会活動
  - 5 UPIASへの参加
  - 6 ダービーシャーにおける活動
  - 7 DIALの設立
  - 8 ダービーシャーにおける障害者連合組織の結成
  - 9 イギリス型自立生活センターの創設
- おわりに

##### はじめに

社会運動組織の研究では、運動組織を形式化あるいは制度化された実体としてではなく、その動態を捉えること、すなわち、その発生から構造化、再構成化の動的過程を捉えることが求められる。また、そこでは、那須が指摘したように、「組織」と「弁証法的な関係に立っている存在としての人間」が先ずもって想定される必要がある(那須,1991:173)。「弁証法的な関係にある人間」とは、「組織と個人が融合してはならず、かといって二律背反的に対立してもいないという関係にあること」(那須,1991:173)であり、そのような関係において、組織とそれに参加する個人は、コミュニケーションを通して形成・変化し続ける。

したがって、社会運動組織の研究では、社

会運動組織の発生からその展開過程において、個々のメンバーの体験、その体験の言語化と共有化の過程、共有化された体験の表象が社会変革への意図に転換・彫琢されてゆく過程等が、メンバー間及び組織外部の団体・個人とのコミュニケーション過程を通して詳細に検証される必要がある。

筆者がその分析対象とする「隔離に反対する身体障害者連盟 Union of the Physically Impaired Against Segregation : UPIAS」は、イギリスの障害者運動において、ディスアビリティとしての「障害問題」をいち早く概念化し、その理論的練成と実践化への取り組みを通して、国際的な障害者運動の思想形成に多大な影響を及ぼしてきた組織であるが、小論の目的は、このUPIASのコアメンバーであったデイビス夫妻(Ken/Maggie Davis)のライフヒストリーにおけるディスアビリティ体験と、さまざまな組織的活動、及びそこで練成されたディスアビリティをめぐる思考を辿ることにある。

成が指摘したように、社会運動の基底には、当事者の承認要求が尊重されなかったという経験がある(成,2004:63)。障害者運動におけるそれはまさに個々のメンバーたちのディスアビリティ体験であり、このディスアビリティ体験が障害者たちをして組織的活動へと動機づけることになる。しかし、このディスアビリティ体験、すなわち、障害者たちの人格的同一性に対する暴力的な抑圧や、その権利と社会的価値、尊厳の剥奪等といっ

た経験は、それ自体として直ちに社会運動という形での能動的な行為に変換されるわけではない(成,2004:63)。この受苦の体験を社会運動や闘争に変換させる精神的な中間項は、「恥辱や憤激、傷つけや尊重の剥奪といった否定的な感情レベルの反応」であり、こうした感情レベルの反応は、不当な理由で社会に承認されていないという認識に結びつく(成,2004:63)。そして、この個々の体験や認識が、さまざまな形態のコミュニケーションを通して、社会的・政治的文脈に位置づけられつつ交換・共有されることが、社会運動や闘争の組織化の契機となるのである。

このような観点から筆者は、UPIASという社会運動組織の研究において、先ず、UPIASの牽引者となったコアメンバーたちのライフヒストリーとそこでのディスアビリティ体験、そして、その体験に対する彼らの感情レベルの反応を辿ることが不可欠であると考えているのである。

ともにその人生の途上で障害を負ったデイビス夫妻はUPIASの結成当初よりそのコアメンバーとして、ポール・ハント(Paul Hunt)やヴィック・フィンケルシュタイン(Vic Finkelstein)らとともにこの組織を牽引した。また、彼らはUPIASの理論的・実践的リーダーとしてだけではなく、ダービーシャーという地域における草の根運動を通して、ケア付き住宅(Grove Road Housing Scheme, 以下、カタカナで表記)を実現させ、また、イギリスで初めての自立生活センター(Derbyshire Centre for Integrated Living : DCIL)を設立し、さらには障害者団体の連合組織である障害者団体協議会(British Council of Disabled People : BCODP)の結成等、全国的・国際的な障害者運動の展開においても、常にその中心的役割を担い、80年代以降に活性化するイギリス障害者運動を主導してきた。

小論では、このマギーとケンのディスアビ

リティ体験や、彼らのコミュニティであるダービーシャーにおけるディスアビリティへの抵抗と障害者のコミュニティへの統合化(integration)の実現に向けたさまざまな活動を辿りながら、彼らのディスアビリティに対する「感情レベルの反応」とともに、そのディスアビリティをめぐる思想形成の過程を検証することを目的とする。

なお、ここで用いるデータは、UPIASの内部回覧文書であるUPIAS *Internal Circular* やオープン・ニュースレターにおいてケンとマギーが執筆した記事、その他の各種エッセイや報告、そして、筆者が2011年10月に実施したマギーへのインタビュー調査(2011年10月21日、マギーの自宅で実施)で得られたデータ等である。

## 1 マギーが障害を負うまで

1942年、労働者階級出身で社会主義思想を持つ父と、ミドル階級出身でやや右寄りの思想を持つカトリック信者の母との間にマギーは産まれた。彼女は地元のカトリック系の小学校を経て、13歳から17歳までコンベント・スクール(修道院の学校)で学んだ。

マギーはコンベント・スクール在学中より、将来、美術を学びたいという夢を持っていたが、貧しい実家には彼女を美術大学に入学させる経済的な余裕はなかった。高校卒業が近づいた頃、マギーは画家になる夢を断念し、看護学校への進学を考え始める。そして、コンベント・スクール卒業後、1年半のストリート・ワイズ(通りの知恵を学ぶ)期間に地域でさまざまな短期の仕事を経験したのち、18歳の終わり頃、ロンドンのガイズ・ホスピタルの看護学校に入学した。ここで3年間の看護師養成課程を経て、さらに1年間、高等専門課程で学んだ。当時、このガイズ・ホスピタルの看護師養成課程はイギリスでも有数の看護学校として名を馳せ、この養成課程を修了した看護師たちは世界各地の病院から迎え

られたと言う。

ガイズ・ホスピタルの看護師養成課程を卒業し、4年間のハードな勉強の日々から解放されたマギーは友人とともに、その友人の伝手を頼って、レバノンでひと時の休暇を楽しみ、そのまま、レバノンの病院で職を見つけ、1年半の間そこで働いた。

ある日、マギーは友人の車の助手席に乗ってベイルート市内をドライブ中に事故に遭遇する。車は大破したが、マギーには外傷もなく、さほど痛みも感じなかったので、彼女はそのまま歩いて自宅まで戻った。翌日もそれ以降も、少し首が硬く張っている感覚はあったものの、痛みはなかったので、レントゲン等の診察も受けずに仕事を続けた。

25歳の頃、マギーはロンドンに戻り看護師派遣会社を通じて、派遣看護師としてパートタイムで働き始める。

このロンドンでの再出発からしばらく経って後、派遣会社からホテルで暮らすある高齢女性に対する10日間のケアを依頼された。ホテルでこの女性への泊り込みのケアをしていた時、マギーは自分の首のあたりに違和感を覚えた。寝る時にも枕がフィットせず、気分も悪かったという。ホテルでのケアを始めて3日目の夜、その高齢女性が軽度の脳梗塞の症状を起こしたので、マギーはこの女性のかかりつけの医師に電話をし、女性に寄り添いながら医師の往診を待った。しかし、マギーの意識はそのまま途絶え、気づいた時には病院のベッドに横たわっていた。つまり、往診の医師がホテルの部屋を訪れた時、マギー自身も女性の傍らで床に倒れていたのである。往診の医師は直ちに救急車を手配し、マギーをロンドンのセント・ジョージ病院に運んだ。

この病院には、かつてマギーとともに看護の訓練を受けた学友や、ロンドンに戻ってからの仕事で知り合った医師たちが何人かいた。後日、この知り合いの看護師や医師らが言うには、救急車で運び込まれた際に、意識

のないマギーに対して最初に施された処置は胃洗浄だったという。この病院は当時、ロンドンの治安のあまり良くないハイドパークコーナーという地区にあり、ここに救急で運ばれる患者の多くは、ドラッグや酒のオーバードーズ（過剰摂取）によるものだったのだ。マギーを担当した医師は救急患者たちへの偏見と先入観によって、レントゲンを撮る等の診察をすることもなく、先ず彼女に胃洗浄を施したのである。

4年間、マギーとともに看護師としてのトレーニングを受けた友人の男性看護師がその場に居合わせ、このマギーへの処置に対して激怒し、「彼女がオーバードーズなわけがないだろ、きちんとチェックしろ」と医師に食ってかかったそうだが、その医師はまったく聞く耳を持たなかったという。

翌日、マギーが意識を回復した時、彼女はベンチレーターにつながれていた。そのため、彼女は言葉を発することができなかった。意識が戻った時、マギーはすぐに、自分の手足が麻痺していることに気づいたが、それを看護師に訴えることができなかった。ベンチレーターの計器を見れば、彼女が自力呼吸をしていることは分かったはずだが、医師も看護師もその計器をチェックしなかったもので、誰もそのことに気づかなかった。ベットサイドにやってきた医師が「私の言うことが分かったらうなずきなさい」と言ったが、マギーは首を動かすことができず、もどかしく、怒りではちきれそうだったという。

一度意識を回復してから、再び意識を失い、次に目覚めた時には、ベンチレーターは外されていた。最初に意識が戻った時には、足に反射の感覚があったことを覚えているが、二度目に目覚めた時には、もうその足の反射は消失していた。おそらく、その間に脊椎の状態がどんどん悪くなっていったのだろう。当然の治療手順が施されずに放置された結果だった。

当時からの知り合いで、現在もマギーの友人である作業療法士のある女性は「セント・ジョージ病院は、あなたにできる限りの『非サービス』をしてしまったのよ。もし、あの時、病院がきちんとした処置をしていれば、あなたの足の感覚は残っていただろうし、少しは動いていたかもしれないわ」と未だに怒っているという。

救急病院を退院して、地元の脳神経外科病院での6週間の入院後、バッキングバムシャーにあるストックマントフル病院に移った。この病院はルドビック・グットマン博士によってイギリスで最初に創設された脊椎損傷の専門病院だった。ここでマギーはさまざまな検査を受けた後、担当医から過去に事故に遭ったことはないかと尋ねられた。マギーがペイルートでの交通事故のことを話すと、医師は「おそらく、その時にずれた首の骨が摩擦によってどんどん悪くなって、1年後に発症したのでしょう」と説明したという。

## 2 施設入所の拒絶

このようにして、マギーは26歳の時に全身性麻痺の障害者となった。この当時、マギーには婚約者がいたが、マギーの方から別れを切り出し、婚約は解消された。

やがて、マギーは主治医よりストックマントフル病院の退院を促されたが、彼女は実家に戻りたいとは思わなかった。その頃、父は既に亡くなっており、母だけが残った実家に帰っても、母が経済的にも身体的にもマギーを支えることは不可能だったし、その住環境も全くアクセシブルではなかったからだ。

そこでマギーは病院に隣接されていた障害者用のホステルに仮住まいをすることになった。数ヶ月間、このホステルに住んでいたが、退院患者の仮住まいを目的として設置・運営していたホステル側は、元患者たちの入居期間が長期化することを好ましく思っていなかった。やがてホステル側は、マギーに身体

障害者施設への入所を勧めるようになる。

その当時、イングランドには脊椎損傷や脳梗塞の後遺症等による全身性障害者のために建てられた施設が幾つかあったのだが、これらの施設は24時間のナースング・ケアを要する人たちを対象とした施設だった。マギーは最初から自立した生活を求めていたので、ホイスト（障害者の体を吊り上げる小型の機械）等の設備があり、可能な限り独力で暮らせる設備を求めていた。しかし、彼女のこの希望に合う施設は一つも見つからなかったという。

施設を探しあぐねていた頃、ホステル側からチェシャー・ホームを紹介された。ポール・ハントが14年間暮らしたレ・コートである（マギーがレ・コートを紹介された頃には既にポールはそこを退所していた）。マギーはホームの創設者であるレオナルド・チェシャーを嫌っていたので、チェシャー・ホームでは暮らしたくなかった。彼女はチェシャーのチャリティー事業のすべてが、彼の戦時中の原爆投下への関与に対する個人的な罪悪感に根ざしたものであると考えていた。

しかし、いっこうにホステル退所の見通しを立てないマギーに業をにやしたホステル側は、彼女に対して、チェシャー・ホームの見学を強く促した。そこで、マギーは仕方なく、とりあえず一度、チェシャー・ホームを訪問することに決めた。しかし、彼女にはある企みがあった。ホステルで仲良くなったソーシャルワーカーから薦められた企みである。マギーがチェシャー・ホームを嫌っていることを知っていたそのソーシャルワーカーは彼女に「とても行儀悪くしなさい。そうしたら、入所しなくてすむから」と助言したので。マギーはチェシャー・ホームを訪れ「とても行儀悪く」したらしい。マギーの訪問を出迎えたチェシャー・ホームの入所者たちは彼女に「二度と来るな」と毒づいたそうだ。マギーは心の中で「よし!」と思い、ホステル側に



それを報告した。

しかし、このマギーの企ては功を奏さず、チェシャー・ホームはこの「行儀の悪い」マギーの入所を許可した。この予想を裏切る結果に戸惑いながらも、どうしてもホームに入所したくなかったマギーはこれを拒否した。当然、ホステル側はこのマギーの態度に激怒した。

このように、ホステル側と対立しつつ、住む場所を探していた頃のある日、マギーの出身校であるガイズ・ホスピタル看護学校から彼女に仕事のオファーがあった。新任の看護師たちへの講義の依頼である。これから看護師として働き始める新人たちへ、看護師でありながら障害者となったマギーの体験が役立つと思われたのである。ガイズ・ホスピタルはマギーのための介助者を用意し彼女を迎えた。その後もマギーは何度か頼まれ、講義のため、ガイズ・ホスピタルに通った。

ある日、いつも通り講義を終え、帰り支度をしていると、一人の中年の女性受講者が彼女のもとにやってきてこう言った。「私は障害者のあなたから教わることなど何もないわ。あなたには『あなたに適した場所』があるのだから、そこに引っ込んでいなさい」。マギーがその受講生に「私に適した場所ってどこ？」と尋ねると、受講生は「チェシャー・ホームよ」と答えたという。

### 3 ケンとの出会い

マギーがケンと初めて出会ったのはこの頃（1969年頃）である。共通の友人を通しての出会いだった。

マギーと出会う以前、ケンは空軍に所属し、イングランド東部のイースト・アングリアの基地で働いていた。彼はそこでの自分の仕事が核兵器の開発と関係していることを知り、その仕事を辞めたがっていた。その後、トルコ-キプロス紛争の勃発によって、ケンはキプロスを経て、中近東のエイダン（スエズ運

河の近く）の基地に異動し、核兵器の開発から逃れることができた。彼はこのエイダンの基地でダイビングの訓練中に頸椎損傷を負った。受障時、彼には妻と二人の子どもがいた。

事故後、ケンはマギーと同じく、ストックマントフル病院で1年ほど、治療とリハビリを受けた。当時のケンの自宅はアクセシブルだったので、一旦は自宅に戻ったが、彼の妻が障害者となったケンを受け容れることができず、結局、妻は二人の子どもを連れて彼のもとを去っていった。家族が出て行った後、ケンは弟と一緒にバンガローに住み、弟からの介助を受けて生活をしていた。ケンは自立への志向が強く、車の運転もできたので、弟一人の介助だけで生活をおくることができたという。

マギーがケンと出会ったのは、ちょうどこの頃である。彼らは会話を重ねるうちに、互いにソウルメイト soul mate（深い精神的な繋がりを感じる大切な人物）として魅かれ合うようになり、やがて一緒に住むことを望むようになった。

当初、障害者になったばかりのマギーとケンが共に中途障害者としての体験を語り合う中で共有したのは、障害者へ負わされるディスアビリティへの怒りではなく、混乱と驚愕だったという。二人は障害者になった途端に、コミュニティの中に行き場所も、働く場所も、そして家族さえも喪失してしまったことに、ただただ驚き、途方に暮れていたのだ。

この混乱と驚愕の只中で目に留まったのがガーディアン紙に掲載された「障害者自身による新しい組織の結成」を呼びかけるポール・ハントの投稿記事だった。ポールのその小さな記事を読んだ時、マギーは暗闇の中から手を差し伸べられ、「こちらへ一緒に進みましょう」と誘われたような気がしたという。その後、ケンとマギーはUPIASの活動を通して、障害者となった自らの置かれたディスアビリティ状況を明確に理解するようになる。

後にマギーはUPIASのオープン・ニュースレターである *Disability Challenge* 2に次のように書いている。

UPIASは私の置かれた状況を私にはっきりと理解させてくれた。私は自分と自分の仲間が他者によって決められた解決方法によって、かえって苦しめられていることを理解できるようになった。私たちに必要なことは、私たちの問題に対して、私たち自身の経験から解決方法を見出すことである (Maggie,1983:8)。

ケンと一緒に暮らすことを望みながらも、ホステルからの退所を強く迫られていたマギーは、一時的に住む場所を見つけないければならなかった。また、この頃には、マギー自身もホステルに居づらさを感じるようになっていた。なぜなら、他の元患者たちとは異なり、自己主張の姿勢を崩さなかったマギーは、生活のさまざまな場面で職員たちと衝突を繰り返し、結果として、多くの職員たちから疎ましがられるようになっていたからだ。

当時、イギリスでは国策として、若年慢性患者施設 (Young Chronic Sick Unit : YCSU) の建設が進められていた。マギーはこの施設名称に違和感を覚えながらも、いまのホステルよりはましだろうと考え、生まれ故郷であるエセックスのYCSUへ入居したい旨を担当のソーシャルワーカーに告げた。ソーシャルワーカーがこのYCSUへマギーの入所を打診したところ、すぐに先方から入所許可の返信が届いた。その施設は、当時、国が建設した16か所のYCSUのうちの1つだった。

#### 4 ピアス・ハウスにおける自治会活動

このエセックスのYCSUの運営責任者は、ジョン・ピアス (Joan Pearce) という元看護師だった。YCSU入居後、マギーはピアスを高く評価するようになる。なぜなら、この

運営責任者は、施設におけるマギーら入所者による自治を尊重し、それを促していたからだ。

例えば、当時の身体障害者施設における入所者の一般的な呼称は「患者 patient」であったが、ピアスはこの呼称を職員たちに許さず、「入所者 resident」と呼ばせた。また、彼女は事あるごとに入所者らに対して「この施設をどのように運営するかを自分たちで考え、自分たちで決めなさい」と勧めていたという。

マギーによると、ピアスはマギーが入居する前から、マギーがどういう女性かを聞き知っていたらしい。おそらく、ピアスはマギーに期待していたのだろう。入所後すぐに、ピアスはマギーに入所者の自治会を結成することを勧めた。マギー自身もホステルでの苦い経験から、入所者が施設運営をコントロールすることの必要性を痛感していたので、直ちに自治会を組織した。しかし、他の入所者たちの多くは自治会に参加したものの、内心は職員たちと対立し、職員たちを怒らせることを怖がっていた。マギー自身は何も怖くなかったという。彼女はいつも「今より酷いことなんて何もない」と思っていたからだ。

みんなの不満を聞いて、代表して職員に意見をぶつけに行って、振り返ってみると、そこに誰も付いて来ていない、ということがよくありました (Maggie, 21/10/2011)。

この頃、既にボールをはじめユニオンのコアメンバーらと連絡を取り合っていたマギーは、この施設でのさまざまな体験を、UPIASの初期メンバーたちと共有することができた。また、施設の入所者向けのニュースレターを作成する際にも、そのノウハウをUPIASから学ぶことができた。

ケンは毎週、ダービーから会いにきてくれた。ピアスはケンが来る日には必ず、マギーの部屋にもう一つのベッドを用意してくれ、

マギーとケンが共に過ごせるように配慮してくれたという。

しかし、この入所者自治を第一に考え施設改革に取り組んでいたピアスがある日突然、施設理事会において解雇を言い渡されることになる。ピアスが理想の施設づくりを目指して運営責任者に就任してから僅か4年目のことだった。マギーによると、解雇理由は「入所者に権限を与え過ぎた」ことにあったという。

マギーは自治会活動を通して、入所者の生活改善に熱心に取り組んでいた。例えば、「若年慢性患者施設」という施設名称に納得できなかった彼女ら自治会は、ピアスへの敬意を表わすために、施設名称を「ピアス・ハウス」に改称するよう要求したり（これは施設の管理運営委員会で大問題になったらしい）、施設の見学者や訪問者が自分たちの居室を勝手に覗くことを拒否したり、外出に必要とされた書類での申請方法に対して抵抗を繰り返した。

このようなマギーらの活動を常に理解し、彼女らの要望を尊重し続けたピアスはそのことを理由に解雇されたのである。マギーら入所者たちは、このピアス解雇に反対し、所管自治体の関係部署へ請願書を提出したが、解雇決定が翻ることはなかった。ピアスが解雇された後のピアス・ハウスにおけるマギーら入所者の置かれた状況と、自治会による抵抗活動については、ケンとマギーが*Circular*に投稿した記事を通してUPIASメンバーに詳細に報告され、UPIASとしてこの施設問題をどのように捉えるのか、また、入所者たちをUPIASとして支援すべきか否か、そして、支援するとしたらどのように支援すべきか、等をめぐって議論が交わされた。その議論の過程を少し辿ってみよう。

ケンとマギーがはじめてUPIASのメンバーにピアス・ハウスでの出来事を報告したのは、1974年3月に回覧された*Circular*7号・

8号への投稿記事においてである。彼らはその記事の中で、マギーがその施設の一室で暮らしていること、この施設の大半（75%）の入所者が4人部屋に居住していること、施設の中に一步入ると、騒々しく、施設特有の臭いが漂ってくること、利用者はプライバシーの全くない環境に置かれていること、自立を促す設備は肢体不自由者向けの手すりだけであること、利用者の生活は管理され、施設外部の友人を招くことも禁止されていること、さらに上層部の指示に従わない職員はピアスと同様に解雇の脅しを受けていること、等を克明に描写し、この環境はまさに「病棟」と呼ぶに相応しい環境であり、「ピアス・ハウス」ではなく、「ピアス病棟」と呼ばれるべきであろうと述べている（Ken,1974a:7-10）。

また、ケンは、十分なスタッフがいれば、入所者は正午まで寝かされることもなく、買い物や映画、社会活動、雇用の機会等を施設の外に求めることができるはずだと述べ、マギーがそれらを実現するために、自治会の更なる組織化に力を注いでいることを紹介している（Ken,1974a:8）。

さらにケンは同年6月の*Circular*8号においても、多くの入所者たちがマギーの呼びかけに希望を抱きつつ耳を傾けながらも、職員からの反発を恐れ、マギーとともに闘うことを避けていること、それは入所者の「施設病institutionalism」と言わざるを得ない現象であること、故にマギーが孤軍奮闘し、過重なプレッシャーに晒されていること、等に言及している（Ken & Maggie,1974:12）。

また、マギーが施設側へ提示した幾つかの要求項目は、最初はやんわりと、やがては強硬に押しつぶされ、マギーが職員たちからの脅迫に晒され、また、彼女自身の家族からも職員への反抗を止めるようプレッシャーをかけられ、不安な毎日をおくっていることが報告されている（Ken & Maggie,1974:12-14）。

これらピアス・ハウスに関するケンとマギー



の報告は、多くの障害者たちが経験してきた「施設問題」を象徴する典型的な事例としてUPIASメンバーたちに受け止められたという。

ユニオン（UPIASのメンバーたちは自分たちの組織をこのように呼んだー筆者）のメンバーたちは、このピアス・ハウスのような若年慢性患者施設の存在を認めないだろう。しかし、この当惑させる現実は今や全国に蔓延しているのだ…略…長年にわたって、疑われることもなく、これら施設ケアは障害者のケア問題を隔離的に解決する方法として採用されてきたのだ（Ken,1974a:7）。

このように今まで疑われることのなかった施設政策の歴史と現在を糾弾した上で、ケン は、一体、誰がこのような施設を必要としてきた（いる）のか、とメンバーたちに問いかける。さらに彼は、施設という建造物は障害者たちの「真のニード」によって創られたものでは決してない、と主張する。そして、そもそも社会が、障害者の「真のニード」に対して真摯に向き合ってこなかった結果が、このような施設の存続を許してきたのだと結論づける（Ken,1974a:7）。

また、ケン は施設生活が障害者たちにもたらす深刻な問題、すなわち「無力化 powerlessness」の問題についても言及する。彼は（マギーと共に闘おうとしない）「無気力な入所者たち」を批判することはできない、と言う。なぜなら入所者たちは「何と闘うべきかを知らない」からだ。多くの入所者たちは慢性の「施設病」に罹っており（Ken,1974a:10）、即物的な問題（食事の量や質など）以外の出来事に関する無関心と、権威者への従順さのうちに日々を送っている（Ken & Maggie,1974:12）。ケン は、このように彼ら入所者が無力化されるのは、施設生活において有形無形の抑圧に晒され続けてきたからだと言及する。

率直に言えば、ケアの提供がなければあなたは死ぬ。だから、あなたには不快について熟考する余裕がない。あれこれ考えることよりも、生きるための支援の継続性の保証が重要なのだ。だから、施設というボートを過度に揺らす危険を冒したくない。施設の中の闘いは常に不安定さとともにある。黙認すること、忍従することは、安全保障を意味する。しかし、それは「施設病への罹患」というリスクを常に伴った「安全」に過ぎないのだが（Ken & Maggie,1974:12）。

このように述べた後に続けてケン は、「歯向かえば、ケアを停止され、死に至る」という入所者たちの置かれたヴァルネラビリティや、それ故の無力化/施設病に関するこのような描写は、「私の想像の産物に過ぎないのだろうか」とメンバーたちに問いかける。

確かに現実的には、職員に歯向かったからといって、生きるために不可欠な支援を拒絶されることはないだろう。しかし、とケン は言う。完全に支援が拒絶され、放置されることはないが、多くの場合、〈灰めかし〉や〈からかい〉によって、また時にはより露骨な表現で（『言うことを聞かないのなら、施設から出て行け』等）、「従順であれ」という脅迫が常に入所者たちの意志を挫くのだ、と（Ken & Maggie,1974:12）。

このように、ケン は、当時、長期入所型施設の社会学的分析によって注目を集めていたゴッフマン（Erving Goffman）の研究に依りながら、マギーたちが置かれたピアス・ハウスの問題を分析しつつ、「隔離に反対すること」を明言するUPIASがこのピアス・ハウスの闘いにどのように取り組むのかを発信すべきではないかと訴える（Ken & Maggie,1974:12）。

ポールとジュディはこのケン の問題提起に直ちに応じ、マギーに対して連名で手紙を出している。彼らはその中で、1) *Circular* においてピアス・ハウスで生起している問題を

特集として取りあげる、2) ユニオンのメンバーたちから寄付を募り、入所者たちの活動を支援する、3) メンバーたちに呼び掛け、自治体の施設管理部局の代表に手紙で訴える、4) ユニオンからの公式の文書を施設管理部の代表に提出する、5) 他の障害者団体へも支援を呼び掛ける、等を提案し、これ以外にもユニオンとしてできることがあれば、是非教えてほしいと伝えている（Ken & Maggie,1974:12）。後日、ケンはこの手紙によって、マギーがとても勇気づけられたことを *Circular* に記している（Ken & Maggie,1974:12）。

しかし、この「ユニオンとして」のピアス・ハウス問題への取り組みの提起について、一人の女性メンバー（以下、Aと記す）から異論が提出された。*Circular* 9号においてAは、「現時点において、ユニオンがピアス・ハウスにおけるマギーの闘いを、ユニオンのイシューとすることには慎重であるべきだ」と主張する（A,1974:2）。その理由として、Aは精神病院における強制退院の問題を例にあげる。

私の知るところによると、現在、イギリス全土の精神病院から約600名の患者が他の病院や自宅へ帰されている。このような精神病院の強制退院の状況は、障害者施設などの入所者たちにも危機感を与えている。…略…つまり、「あなたがこの病院を気に入らないのなら退院すればいい」という脅迫である。ユニオンがこれらの脅迫を受ける恐れのある身体障害者のための施設や病院に替わる「住居」と「ケア」を確保できるまで、われわれの支援は施設入所者たちの助けにはほとんどならないだろう（A,1974:2）。

このAの意見に対してケン、ピアス・ハウスの問題はUPIASにおいて最初に提起された具体的な「施設問題」であり、UPIASがその組織方針に掲げるように、施設を隔離の象徴としてとらえ、今後もこの問題と対峙

しつつ、同様の状況に置かれているUPIAS内外の障害者たちへの組織的支援に取り組んでゆく意志を持つのなら、「われわれはピアス・ハウスの経験から多くを学ぶ必要があるはずだ」と反論する（Ken,1974b:2）。

ポールもまた、Aの「ユニオンの支援が入所者たちに新たな脅威をもたらす」という懸念に対して、UPIASはマギーら入所者たちからの求めがあって初めて支援を開始するのであって、彼女らの頭越しに施設側と交渉する等の行為によって、入所者らをさらに不利な状況に追い込むような方法は採らないことを約束する（Ken,1974b:2）。さらにポールは「ユニオンが施設に替わるオルタナティブを用意できないのであれば、ユニオンは公式に施設問題に関わるべきではない」というAの意見にしたがうなら、われわれは今後、どのような施設の、どのような問題状況においても入所者たちを支援することはできないだろうと反論する（Ken,1974b:2）。

後にAの希望により、ピアス・ハウス入所者たちへの支援の是非に関する採決はUPIASメンバーの *Circular* 誌上における投票によって決せられることになったが、結果として、Aの意見を支持する者は皆無だった。

## 5 UPIASへの参加

少し時間を遡るが、上述したように、マギーとケンはガーディアン紙に掲載されたポールの新しい組織結成の呼びかけ（1972年9月20日ガーディアン紙）にすぐに応じ、UPIASの正式メンバーとしての活動を始めた。

UPIASは当初、組織の名前もなく、「ただの障害者の集まり」（Maggie,21/10/2011）だった。ポールとは異なり、マギーとケンはともに中途障害者だったが、「受障によって、突然自由を奪われたからこそ気づくことがたくさんあった」（Maggie,21/10/2011）ので、障害者になって初めて経験したさまざまな抑圧について、彼らは他のUPIASのメンバー

らと議論を交わし、反ディスアビリティの思想を培っていった。

マギーとケンは一ダビー市に暮らしながら、障害者の「コミュニティへの統合」に必要な社会資源の新設・改廃について、体験的に検証しながら、*Circular*を通してUPIASのメンバーたちに発信し続けた。

「だけど…」とマギーは当時を振り返りながら、「ユニオンのリベラルな議論は多くの人にとっては難し過ぎたようです。参加した障害者の多くは、すぐに組織から抜けていきました」と述懐する。

UPIAS発足直後の組織名称をめぐる議論を紹介しよう。マギーやケン、ポール、ヴィックやリズ（ヴィックの配偶者）ら、UPIASのコアメンバーたちは、組織名称に「隔離 Segregation」という言葉を掲げることを主張した。彼らは、「まず、障害者に対する『隔離』が実在することを明確に認識し、それへの抵抗を宣言しなければならない」と考えていたので、「隔離への反対 Against Segregation」を組織名称として掲げることを求めた。しかし、他の何人かのメンバーたちは「過激すぎる」、「敵対心を煽り過ぎる」等と反対し、「統合を求める For Integration」という言葉に置き換えるべきだと主張した。この議論の詳細な経緯は別稿に譲るが、最終的に投票によってコアメンバーたちの意見が採用され、UPIASは「隔離に反対する身体障害者連盟 Union of the Physically Impaired Against Segregation」となった。しかし、この「隔離に反対する」という姿勢を明確に持ち得なかったメンバーたちは、少しずつ、UPIASの活動から離れていったという。

マギーによると、当時、UPIASのメンバー間に回覧される *Circular* とは別に、コアメンバーのみに回覧される「秘密のニュースレター」があったという。それは「いま思うと、どこか見戯めいていて馬鹿げていた」が、その当時、特にマギーのように施

設に入所していたUPIASメンバーらは常に「どこかに情報が漏れてしまうと、自分たちの活動が抑え込まれてしまうのではないか」(Maggie, 21/10/2011) という不安と恐怖を抱えていたのである。

## 6 ダービーシャーにおける活動

UPIASに参加してからしばらく後、マギーはピアス・ハウスを離れ、ダービー市のクレスフィールドのフラットでケンと暮らし始めた。*Circular* に記載されたマギーの姓がケンと同じく Davis に変わり、その住所がダービー市に移ったのは1974年の7月である。二人はそれぞれ通信制大学で学びながら（マギーは社会学と芸術を学んでいた）、自分たちの住むコミュニティで「施設のオルタナティブ」となる住居の開発計画（グローブロード・ハウジング計画 Grove Road Housing Scheme）に取り組み始めた。

1974年の春から夏にかけて、マギーとケンは「忙しくて目が回りそう」(Maggie, 21/10/2011) だった。彼らはグローブロード・ハウジング計画の監督をしながら、UPIASメンバーたちとの *Circular* を介した討議にも積極的に参加し、同時にクレスフィールドで仮住まいを探しつつ、さらに結婚のための準備も進めなければならなかったからだ。

このグローブロード・ハウジング計画は、UPIASの初めてのオープン・ニュースレターである *Disability Challenge* の創刊号に、ケン自身によって詳細に紹介されているが（Ken, 1981:32）、その基本的なコンセプトには、UPIASの「反隔離 Against Segregation」の思想が色濃く反映されている。ケンとマギーは、ケアが必要な障害者たちにとって、「施設のオルタナティブ」となりうる「理想の家」の明確なイメージを持ちながら、グローブロードの計画に取り組んでいった。

設計と建築は、UPIASの原則である「障害者の主体性を担保しうる限りでの専門家と

の協力」によって進められた (Ken, 1981:34)。彼らはインスキップ・セント・グリーズ住宅協会のディレクターの協力と支援を受けながら、ダービー市の社会サービス委員会とも協議を重ねつつ、計画の実現に向けての歩みを着実に進めていった。それはイギリスで最初のケア付き住宅建設の試みだった。

このケンとマギーの取り組みは、UPIASにおいても、一つの貴重な実践事例となった。UPIASでは、この頃より、ダービー市におけるマギーらの取り組みを見守り、支援しながら、スウェーデンのフォーカス計画を参照にしつつ、より大規模で組織的な住宅政策の検討を進め、1981年の国際障害者年に向けた組織目標として、このフォーカス・タイプの住宅の実現を掲げている (Dick, 1980:3)。また、同時期、ポールがその青春時代を過ごしたハンプシャーのレ・コートにおいても、施設から出てコミュニティでの自立生活を求める「プロジェクト81」と名付けられた実践が始まっている (Dick, 1980:6)。

さて、クレスフィールドの仮住まいに住み始めてからしばらく後、グローブロードが完成し、1976年の冬に彼らはその新しい住居に移り住んだ。「優れた建築家ととても細かく打ち合わせをして取り組んだので、本当に素晴らしい住宅が完成しました」とマギーは言う (Maggie, 21/10/2011)。トイレやバスルームにはホイスが設置され、ガスコンロも平らで使いやすいものだった。後に、その「優れた建築家」はマギーに対して「このグローブロードの仕事は、私が携わったこれまでの仕事の中で最も分厚いファイルが必要とする仕事だったよ」と打ち明けたという (Maggie, 21/10/2011)。

グローブロードは2階建てのフラットで、下階に障害者用の3世帯の住居、その上階には障害者たちのケアにあたる健常者用の3世帯の住居が設けられており、インターコムで全ての居住者は連絡を取り合うことができた。

マギーとケンがグローブロード計画に取り組んでいる時、ピアス・ハウスのある職員から「あなたたちは24時間のケアが必要なんだから、そんな住居を作っても絶対に失敗して、すぐにここ（施設）にもどってくることになるよ」と言われた。マギーはそのことがとても悔しく、グローブロードに住み始めてから最初の一週間、グローブロードの外部から来てもらうヘルパーの時間数がどれだけ必要だったのかを記録し、僅か延べ4時間しか、外部ヘルパーに頼む必要がなかったことを証明した。彼女はその後ずっと自分のケア時間を記録し、グラフを作り、障害者に適したケア付き住居さえあれば、重度の障害者も一般のコミュニティの中で十分に住むことができることを伝えるため、各地を回り講演活動をするようになる。

ケンには後に、*Disability Challenge*の創刊号に、グローブロードにおけるケアの保障について次のように述べている。

住宅におけるサポートは第一義的に公的なサービスであるべきであり、サポートファミリーによる支援がそれを補完する。また、隣人や友人やボランティア等も組み合わせて使うべきであり、その費用は介助手当によって支払われることになるだろう (Ken, 1981a:35)。

しかし、本来、第一義的にサポートを担うべき公的なサービスは、当時、極めて限定されたものだった。故に、グローブロードに住む障害者たちのケアを実質的に担ったのは上階に住む女性たち（マギーが通信大学で知り合った友人や、地方から出てきて住むところを探していたカップルの女性たち）だった。彼女らへの賃金は、ケンが述べるように、障害者世帯に支払われる国の介助手当 Attendance Allowanceによって賄われたが、その手当もまた少額だったので、彼女たちの賃金は僅かなものにしかならなかった。この



ケアラーたちが低賃金にも関わらず、マギーらを支援できたのは、彼女らの配偶者やパートナーである男性たちが働き、一定の収入を得ていたからだ。また、上述のように、グローブロードは「コミュニティへの統合」を掲げたイギリスで最初の障害者向けケア付き住宅計画だったので、このような新しい試みにやりがいを感じてくれる人たちが数多く支援を申し出てくれたという (Maggie, 21/10/2011)。

因みにこのグローブロードは現在もダービー市に残っており、高齢者用のケア付き住宅として使用されている。

グローブロードに転居後、しばらくして、マギーとケン、スウェーデンのある雑誌に広告を出し、スウェーデンのフォーカス住宅に住む障害者に向けて、自分たちのグローブロードと短期間の住宅交換をして、互いにそれぞれの障害者住宅を評価し合おうという提案をしたことがある。

このマギーたちの呼びかけに、あるカップルがすぐに応じ、短期間ではあるが、互いの住宅を交換することができた。このカップルは、全身性の筋性障害を持つジョージという男性障害者と、そのパートナーであるスティーナという看護師のカップルだった。ジョージとスティーナは、マギーたちがスウェーデンに来る前に、自分たちの地元の病院やリハビリ施設等と交渉して、マギーらのためにさまざまな企画を立ててくれたので、マギーらはスウェーデンの障害者福祉について大いに学ぶことができ、また、日常の暮らしの中でも多くの素晴らしい体験を得ることができた。

マギーたちもまた、このジョージとスティーナたちがダービー市でさまざまな体験ができるようにアレンジを試みたのだが、多くの病院や施設は外国の障害者の訪問に対して拒否的だった。また、住宅交換をして数日経った頃、ジョージたちがグローブロードの

地元のパブに行くと、障害者であることを理由に、入店を拒否されたという。スウェーデンでの素晴らしい暮らしを体験し、帰国したマギーらは、この出来事をジョージから告げられ、とても恥ずかしく感じ、また、強い怒りを覚えたという。

グローブロードに戻り、ジョージらにこのパブでの出来事を聞いたマギーとケン、直ちにそのパブに出向き抗議した。その際、パブ側は「車椅子の車輪には土がついているので、障害者が入店すると、カーペットが汚れる」という言い訳をしたそう。そこで、ケンは一般客たちの靴底についている土の量と車椅子の車輪についている土の量を丹念に調べ、そこには大差のないことを示すデータをパブ側に突き付けた。また、マギーは自宅前にそのパブを糾弾する垂れ幕を掲げて抗議活動を続けたという。

## 7 DIALの設立

1981年、ケンとマギー、そしてダービシャーに居住する彼らの仲間たちは、イギリスで最初となる障害者自身が運営する障害者情報相談センター Disablement Information and Advice Line : DIALを設立する。DIALはクレス・フィールドにあった障害者施設内の狭いクローク・ルームを間借りし、その部屋に電話線を引いて、無給の障害者スタッフたち数人によって開設された。DIALのような情報サービスが必要とされた理由について、ケンは次のように述べている。

なぜ、開かれた情報提供サービスが必要なのか。開かれた情報は知識の生の素材である。そして、知識はさまざまな活動や社会組織に効果的に参加するために必要不可欠な道具である。したがって、情報の欠如は、障害者の実質的な社会参加を阻害するのだ (Ken, 1981b:3)。

コミュニティケアの施策が芽吹き始めたこ



の頃、身体障害者のための生活関連サービスや施策が矢継ぎ早に打ち出されたが、サービスや施策間の有機的な体系化には程遠い状態にあり、的確な資源情報を持ち得ない身体障害者やその家族らは、ともすればこの福祉や保健の社会資源の網の目から、取りこぼされてゆくリスクに晒されていた。

また、このケンやマギーらのDIALによる情報障害 information disability を克服する闘いは、専門家たちが「障害問題」に関する知を占有していることに対する抵抗でもあった（Finkelstein, 2004:20）。

DIALの運営を始めてから、障害者やその家族たちから多くの相談が寄せられたが、それらの相談の多くは、単に地域の資源情報を求めるものとどまらず、実際にそれらの資源を活用する際のサポートを求めるものだった。当時を振り返ってマギーは次のように述べる。

たくさんの障害者たちは情報が欲しいと電話をしてきましたが、実際に、その情報を手に入れても何をどうしたらいいのか分からないという人が殆どでした。そこで、私たちは、具体的なガイダンスや支援の必要性を感じ、DIALを作った2年後に、DCDP（Derbyshire Coalition of Disabled People）をここ（クレイクロス）に設立したのです（Maggie, 21/10/2011）。

1977年10月、DIALの呼びかけによって、アクセシブルな情報を探求し開発するためのセミナーがダービー市で開催され、これを契機として、DIALタイプの情報サービスの全国展開が始まった。1978年6月には、各地に族生し始めたDIALを全国障害者情報サービス協議会としてまとめあげるための運営委員会が設置され、その後、この運営委員会によってDIAL UKという全国協議会が発足することになる。そして、1980年代に入ると、DIALは80の支部に拡大し、イギリス全土を

対象とした情報提供サービスを展開する大きな組織に成長する。このDIALによる情報収集と情報提供サービスの拡大は、各地の地方行政に対する障害者組織の発言権の強化にも資することになった。

## 8 ダービーシャーにおける障害者連合組織の結成

1981年、国連が指定する国際障害者年 International Year of Disabled Persons: IYDP を迎えるにあたって、ダービーシャーにおいてもIYDPに関する委員会としてダービーシャー・国際障害者年委員会 Derbyshire IYDP Conference が組織された。この会議はダービーシャー社会サービス局とDIALのIYDPに向けた協議を起点としたものであり、最初の会議は1981年2月に開催され、DIALのメンバーも含めて約120名の委員がIYDPのメインテーマである「完全参加と平等」の実現に向けた検討を行った。その中で、ケンやマギーらDIALのメンバーを中心とした障害者委員たちは、IYDPに向けて日常的にディスアビリティを体験している障害者たちのコンサルテーションと参加を優先させることを強く求め（Ken Davis and Audrey Mullender, 1993:4）、今後、IYDPの目標を実現するためには、健常者が主導・統制する「障害問題」の検討委員会ではなく、障害者自身による組織の結成が必要であることを主張した。

このようにDCDP設立の直接的な契機はIYDPにあったが、ケンには後に、DCDP設立の背景には、1970年代の世界的な「反管理」の思潮と社会運動があったと同時に、グローバルな時代的トレンドとは相対的に切り離された「ダービーシャーに居住する個々の障害者たちの経験」の蓄積があったと述べている。

DCDPの核となる思想には、これら社会的トレンドやグローバルな社会運動の文脈とは切り離さ

れた「ダービーシャーに居住する障害者たちの経験」が横たわっている。それは例えば、「隔離施設での生活を長年にわたり強いられた経験」や「住居を地域に獲得するための苦闘」、「家族の過剰な干渉に対する抵抗」、「大学への入学や雇用の獲得に向かう闘い」等である (Ken Davis and Audrey Mullender,1993:3)。

ケン は、これまでの多くの伝統的な障害者組織が、障害者の自己組織化や障害者自身による運営という形態をとらず、また、その活動を通して「障害者たちの気づき」を促すことを怠ってきたために、これら「障害者のための for disabled people」組織が多くの場合、ディスアビリティに対する対症療法的な方策の模索に終始し、ディスアビリティの原因そのものの解消に向かうことができなかったのだと指摘する (Ken Davis and Audrey Mullender,1993:3)。

この指摘は、DCDP 設立の約10年前に、UPIAS メンバーが Disability Alliance : DA との討議において、DA に対する批判として提示した論理と重なっている。すなわち、「障害者の経験」に立脚しない DA のような専門家組織による「所得保障アプローチ」が、対症療法としての所得保障施策にのみ固執し、そもそも障害者に貧困をもたらしている社会構造的な抑圧 (=ディスアビリティ) を看過しているという論理である。

伝統的な障害者団体は主として「障害者のために」設立されたものであり、そのような団体において、障害者たちは自らの生活をコントロールすることを学ぶことのできない受身的・依存的存在として取り扱われてきた。消費者連合の設立が提案されたのは、このような伝統的な障害者団体における障害者のポジションへの挑戦という意味を持っていた (Ken, 1981c:11)。

1981年の秋に、ダービーシャーに居住す

る約70の障害者組織の代表者や、個人の障害者たち、そして、支援者や家族等も参加して、DCDP 設立会議が開催され、ケンがDCDP 初代委員長に就任した。翌年には、ダービーシャー自治体からの財政的支援を受け、2人の専任スタッフが雇用され、かつてのDIALの事務所をオフィスとして、DCDPはその活動を開始することになる (Ken Davis and Audrey Mullender,1993:8・15)。

「障害者自身の経験に根ざした活動」をそのポリシーに掲げるDCDPは、参加、自立、統合、コントロールという4つのキー・コンセプトのもと (Ken Davis and Audrey Mullender,1993:6)、組織運営に係るあらゆる事項の決議権を日々ディスアビリティに直面している障害者メンバーに限定して付与した (Ken Davis and Audrey Mullender, 1993:24)。しかし、このことは健常者の排除を意味するものではなく、健常者にはDCDPにおいて、障害者のセルフヘルプを支える役割が期待されていた (Ken,1981c:11)。

また、DCDPはその活動において、次の7つの原則を打ち立てた。

- 1) 民主的な代表制に基づく組織であること。
- 2) 身体障害、精神障害、知的障害のすべての人々を対象とすること。
- 3) 障害者のセルフ・ヘルプとその活動を支援し奨励すること。
- 4) 健常者の支援者の参加を可能な限り求めること。
- 5) 障害者の直接的な体験に即して活動すること。
- 6) 自立生活 independent living と地域に統合された生活 integrated living を保障するサービスを提供すること。
- 7) 障害者が自らの問題をコントロールすることを支援すること (Ken Davis and Audrey Mullender,1993:10)。

上述したように、DCDPは、UPIASと同

様、障害者メンバーの受動性・依存性を助長してきた「障害者のための」組織の伝統に対してはもとより、従来のインペアメント種別毎の「障害者自身による」組織が陥ってきた閉塞状況、すなわち、「特定のインペアメント集団の特定ニーズの充足を求める活動への傾斜」という伝統をも打破しようとした。故に、DCDPの活動は「あらゆる障害者において、IYDPの目的である完全参加と平等が実現できるよう、社会の変革に向かうこと」を志向してゆくようになる（Ken Davis and Audrey Mullender,1993:6）。

ケンやマギーらDCDPのコア・メンバーたちは、現実的・具体的なディスアビリティに対して組織的なキャンペーンを展開することをDCDPの設立理由に置いたが（Ken Davis and Audrey Mullender,1993:5）、それはメンバーたちに対して、個を減した組織的活動への奉仕を求めるものではなかった。組織の活動目的は、あくまでもディスアビリティを再生産し続ける社会の変革を第一義とするものであったが、そこでは個々のメンバーの自己評価、尊厳、誇りの回復や集合的アイデンティティの獲得等、いわば自他の価値の気づきと再構築も意図されていたのである（Ken Davis and Audrey Mullender,1993:25）。

このDCDPの初動期、マギーはクレス・フィールドで、この組織とは別に、障害者と健常者が地域生活をともに支え合う生活協同組合 CO-OPs を設立した。この組織は組合員各自の1ポンドの拠出金によって運営されるもので、障害者メンバー個人やその家族が健常者メンバーから何らかの生活支援を受ける場合、健常者メンバーはその対価としていくばくかの報酬を得るという形態をとった（Ken,1982:20）。このマギーの小さなセルフヘルプ組織の試行的実践は、その数年後、当地において設立されるDCILの活動に有益なヒントをもたらすことになる。

## 9 イギリス型自立生活センターの創設

このように、UPIASのコアメンバーとして活動しながら、DCDPを立ち上げ、この二つの組織が展開するさまざまなキャンペーンに身を投じつつ、ケンとマギーは再び新たな組織の設立を模索し始める。それは先述したDCDPの7原則の中の6番目の原則、すなわち、「自立生活independent livingと地域に統合された生活integrated livingを保障するサービスを提供するためのサービス供給組織」である。このサービス供給組織のヒントとなったのは、既に米国において拡大・浸透しつつあった自立生活センター Center for Independent Living : CIL の活動である。

1982年頃からDCDPは、ちょうど同時期、ハンブシャーにおいてCILを立ち上げようとしていた障害者たちとの合同カンファレンスや、BCODPにおいて設立されたCILに関する常任委員会、さらに、1983年ストックホルムにおいて開催されたCILに関するカンファレンス等で、CILのアイディアについて協議を重ねた（Ken Davis and Audrey Mullender,1993:17）。

マギーによると、DCDPのメンバーとハンブシャーのCIL設立検討委員会のメンバーが同じテーブルを囲んで議論を交わしたのはわずか2回だけだったという。彼女によるとDCDPメンバーとハンブシャーのメンバー（John EvansやPhilip Masonという人物等）との間では、その立ち上げようとするCILのコンセプトに大きな隔たりがあったのだという。

このハンブシャーCILの設立を目指す人々との「噛み合わぬ議論」によって、ケンやマギーらDCILの設立準備を進めるDCDPのメンバーたちは、自らの求めるDCILのイメージをかえって鮮明に描くことができた。ケンやマギーらDCDPのメンバーたちは、ハンブシャーのメンバーたちが目指しているような、つまり、アメリカのCILをイギリスに輸

入するようなやり方ではなく、イギリスの文化、制度、そして、イギリスの障害者たちの経験に根差した独自のCILのあり方を模索してゆくことになる。

多くの議論を重ねる中で、やがて彼らはDIALから始まったダービーにおけるさまざまな活動を通して帰納的に抽出された「障害者個人の経験」に基づく7つのニーズへ対応しうるCIL、すなわち、アメリカンタイプのCILよりもさらに包括的なアプローチをとりうるCILを、イギリス型CILのイメージとして浮かびあがらせてゆくことになる。7つのニーズとは、すなわち、情報、カウンセリング、住居、福祉機器、個別介助、交通・移動手段、アクセスをめぐるニーズである(Derbyshire Coalition of Disabled People, 2000:2)。

このセブン・ニーズのコンセプトは、自治体や州議会との連携によって立ち上げたDCIL設立委員会(約30名のメンバーのうち、12名がDCDPの障害者メンバー、残り18が州議会やその他の民間団体のメンバーによって構成されていた)において、ヨーロッパ社会基金 European Social Fundingからの3年間の財政補助を申請する際、DCILの事業目的の明確化とともに提示されたものである(Ken Davis and Audrey Mullender, 1993:19)。

DCILが求める「より包括的なアプローチ」を端的に表しているのが、Integrated Livingという組織名称である。ケン、運動組織の名称には、その存在理由を含意するシンボリックなメッセージが込められるべきであると考えていた(Ken, 1984:2)。

彼は、コミュニティに統合化された障害者の「真の自立生活」の実現を支えるためには、必然的に人的・物的環境を包括的に視野に入れた支援が必要であり、このような視座に立つCILの支援は、さまざまな社会サービスの統合的活用の促進、地域の公的・民間組織や専門職、及び障害者と健常者との統合的な協

働によって推進されると述べている(Ken, 1984:2)。

このように、ケンやマギーをはじめとするDCDPのメンバーたちは、当時のイギリスはもとより、アメリカにもモデルとなりうる実践が存在しない中で手探りの議論を積み重ねつつ、自らのCILのイメージを徐々に描き出し、やがてそれは、ダービーシャーの障害者たちの「われわれ自身のCIL」(Ken, 1984:2)としての輪郭を現してゆくことになった。

アメリカの自立生活運動が求めたIndependent livingの価値志向と、ケンやマギーらの求めるIntegrated Livingとの違いを象徴する一つのエピソードをマギーが思い出してくれた。DCILが設立されてからしばらく経った1980年代の終わり頃、アメリカでエド・ロバーツ(Edward Robertson)らとIL運動を牽引していた女性リーダーの一人(Bと記す)がグロブロードのケンとマギーの自宅を訪れたことがある。くつろいだ雰囲気の中で、彼女らは談笑しつつ、英米の障害者運動が取り組んでいるさまざまな「障害問題」について情報を交換し意見を交わした。話題が自立生活の最も直接的かつ重要な社会資源である介助者(Personal Assistant, 以下、PA)に及んだ時である。マギーがBに「もし、あなたのPAがとても強い腋臭だったらどうしますか?」と尋ねたところ、Bが躊躇うことなく「もちろん、すぐに解雇します」と答えたという。マギーが重ねて「きちんとPAと話し合おうとはしないのですか?」と尋ねると、Bは「そんなことはしません。私たちにはどのようなPAを雇用するかを選ぶ権利がありますから」と返した。マギーはこのBの返答に強い違和感を覚えたのだが、この話は単なる「たとえ話」で終わらなかった。その夜、マギーらの自宅に滞在中のBが、自分がアメリカから連れてきたPAの態度に腹を立て、その場でPAを解雇し、マギーの家から追い出してしまったのだ。その結果、そ



の夜のBの介助をマギーのPAが担うことになったという。

マギーは「彼女は確かにすばらしいファイターでした。だけど、私たちだったら、もっと別のやり方で闘うだろうと思いました」と当時を振り返りながら言う。さらに続けて、「PAは単なる商品のように、気に入らなければどんどん取り換えればいいというものではありません。障害者が健常者を利用して、自分の生活を向上させようとするだけでは、障害者の生活そのものも成り立たなくなると思います」と話してくれた。

1985年、DCDPの提案から、ダービー市の公私の諸機関・組織との3年間の協議を経て、24名のスタッフ（その多くがパートタイム職員であり、当初専任のCILコーディネーターは2名だけだった）と124名のボランティアから組織されるDCILが設立された（Ken Davis and Audrey Mullender, 1993:19）。

このようにマギーとケン、UPIASのコアメンバーとして国内外の障害者運動に積極的に関与しながらも、常に自らのコミュニティであるダービーシャーでの活動から離れることはなかった。2008年12月21日、74歳でケンが死去した際に、長年、ケンとともにダービーシャーで活動したウッドワードはその追悼文の中で次のように述べている。

ケンにはディスアビリティに関する全国的かつ国際的な関心を絶やすことはなかった。しかし同時に、彼はいつも「ダービーシャーの男」であり、徹頭徹尾、彼の心はダービーの丘、村、人々、そして文化とともにあったのだ（Woodward, 2008:11）。

## おわりに

受障後、マギーやケンが被ったディスアビリティとは、彼女らが健常者だった頃には意識することなく享受してきた権利や尊厳の剥奪という、まさに彼女らの「承認要求」を否定する社会的抑圧であったと言える。彼女ら

の闘いは、このディスアビリティの理不尽さに対する怒りによって起動され、その怒りは、やがてUPIASやダービーシャーでのさまざまな活動に結び付いてゆく。

なお、彼女らのUPIASメンバーとしての活動や発言については、UPIAS組織内部のメンバー間のコミュニケーション過程の分析を主題とする別稿において取りあげる予定であるため、小論では割愛した。

筆者の長時間にわたるインタビューの後、マギーは、現代の若い障害者たちの大学入学や就労機会が増えたことを評価しながらも、「ここまで来るために、どれほどの闘いがあったのかを知らない」若い世代の障害者たちの行く末に危機感を持っていると話してくれた。彼女は「だから、あなたがこういう研究（UPIASやその時代の障害者運動を発掘する研究-筆者）をしてくれることはとても嬉しい」のだと言う。「だけど」と続けて、「できれば、ケンが活着しているうちに来てほしかった」と最後につぶやかれた。

UPIASのコアメンバーだった人々の中には既に鬼籍に入られた方も少なくない。筆者がイギリス滞在中にも、ポールやケン、マギーらとともにUPIASを牽引し、後にBCODP（British Council of Disabled People, 現在のUnited Kingdom Disabled People's Council）の初代議長を務め、また、イギリス障害学にも大きな足跡を遺したヴィック・フィンケルシュタイン氏が亡くなっている（2011年11月30日）。今後も、元UPIASのコアメンバーとして活動された方々への聴き取り調査を急ぎたいと考えている。

最後に、「私の<sup>なま</sup>生の声を聴きに来た研究者はあなたが初めてよ」と笑いながら、ダービー市の自宅で、長時間にわたるインタビューに丁寧にお応えいただいたマギーさん、また、マギーさんをご紹介くださったジュディ・ハントさん、そして、UPIAS関係者のご紹介やUPIAS Internal Circularの閲覧にご協力



いただいたリーズ大学障害学センターの  
コリン・バーズ教授に心からの感謝を申  
しあげたい。

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（基  
盤研究(C)）「イギリス障害者運動における社会モ  
デルの源流を求めて」（平成24年度～平成26年度）  
による研究成果の一部である。

# 【引用文献・資料】

- ・ Derbyshire Coalition of Disabled People, 2000, *Disabled People's Information Service, Personal Support Service, Counselling Service*, DCDP.
- ・ Dick Leaman, 1980, FOKUS-TYPE HOUSING PROJECT - A PROPSAL FOR UNION ACTION, *UPIAS Circular.36*, UPIAS.
- ・ James Elder Woodward, 2008, Tributes to Ken Davis, <http://www.leeds.ac.uk/disability-studies/archiveuk/Barnes/tribute%20Ken%20Davis.pdf>.
- ・ Ken Davis, 1974a From Ken Davis, *UPIAS Internal Circular.7*, UPIAS.
- ・ Ken Davis, 1974b, *UPIAS Internal Circular.10*, UPIAS.
- ・ Ken Davis, 1981a, Tenants eye view, *Disability Challenge.1*, UPIAS.
- ・ Ken Davis, 1981b, DIAL UK : DEVELOPMENT OF THE NATIONAL ASSOCIATION OF DISABLEMENT INFORMATION AND ADVICE SERVICES, *UPIAS Internal Circular.40*, UPIAS.
- ・ Ken Davis, 1981c, Developments in Derbyshire, *UPIAS Internal Circular. 45*, UPIAS.
- ・ Ken Davis, 1982, Derbyshire Coalition of Disabled People, *UPIAS Internal Circular. 47*, UPIAS.
- ・ Ken Davis, 1984, *NOTES OF THE DEVELOPMENT OF THE DERBYSHIRE CENTRE FOR INTEGRATED LIVING*, DCDP.
- ・ Ken Davis and Audrey Mullender, 1993, *TEN TURBULENT YEARS : A Review of the Work of the Derbyshire Coalition of Disabled People*. Centre for Social Action, School of Social Studies, University of Nottingham.
- ・ Ken & Maggie, 1974, From Ken & Maggie,

*UPIAS Internal Circular.8*, UPIAS.

- ・ Maggie Hines, 1983, The Link Between Housing & Help, *Disability Challenge.2*, UPIAS.
- ・ Ms. A, 1974, Letters from members, *UPIAS Internal Circular.9*, UPIAS.
- ・ Dick Leaman, 1981, The Union of the Physically Impaired fighting against segregation, *ibid.*, UPIAS.
- ・ 那須壽（1991）「社会運動組織の新たな概念化をめざして：『現実構成パラダイム』構築の試み」社会運動論研究会編『社会運動論の統合をめざして：理論と分析』成文堂
- ・ 成元哲（2004）「なぜ人は社会運動に関わるのか：運動参加の承認論的展開」大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人『社会運動の社会学』有斐閣選書。
- ・ Vic Finkelstein, 2004, *DISABILITY STUDIES : PUTTING THEORY INTO PRACTICE*, a revised and expanded version of the present paper. 26-28 JULY 2004, Lancaster University.

[Abstract]

## The Roots of Social Model (2) : The Davises' Experience of Disability and Integration in Practice

Koichiro TANAKA

Ken and Maggie Davis, who both acquired impairment in adulthood, led UPIAS as core members from its early days along with Paul Hunt and Vic Finkelstein. They were not only leaders of UPIAS in its philosophical and practical issues, but in Derbyshire, through grassroots activities successfully built a residence with care facilities (Grove Road Housing Scheme), founded Britain's first Centre for Integrated Living, and in 1981 formed the British Council of Disabled People (BCODP, later United Kingdom Disabled People's Council). They played a key role in the national and international disability movements, and led the way in the British disability movement scene which picked up momentum in the 1980s. This paper traces their disability experiences, resistance towards disability and various activities for integrated living in their home region of Derbyshire and examines the "emotional level responses" the disability experiences brought about, and the formation process of their disability philosophy.

